

研究・調査報告書

報告書番号	担当
391	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Liver transplantation for alcohol-related cirrhosis: a single centre long-term clinical and histological follow-up. アルコール性肝硬変に対する肝移植：一医療機関での長期の臨床的・病理学的追跡	
執筆者	
Schmeding M, Heidenhain C, Neuhaus R, Neuhaus P, Neumann UP.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Dig Dis Sci. 2011 Jan;56(1):236-43.	
キーワード	
アルコール関連肝疾患、肝移植、再飲酒、肝線維化	
要旨	
背景： アルコール性肝硬変は今日、肝移植の大きな適応理由となっている。臓器不足と待機者の死亡のため、適応および倫理的問題について議論されてきた。本研究では、我々のセンターで肝移植を受けたアルコール性肝硬変患者の転帰を批判的に分析し、再飲酒の頻度や長期の病理学的追跡についても検討した。	
方法： 我々の施設でアルコール性肝硬変に対する肝移植を受けた 305 人の患者を移植後 3-5 年追跡した。移植後、1, 3, 5, 10 年後に生検を行った。標本は、炎症、拒絶、脂肪化、線維化/硬変に関してステージ分類した。臨床所見、血清学的指標、免疫抑制プロトコル、拒絶エピソード、患者と臓器の生存について記録した。	
結果： アルコール濫用は 27%の患者で発生した。アルコール飲用にも関わらず、5 年間の臓器および患者生存率は良好であった。10 年間禁酒した患者では有意に生存率が良かった (82%と 68%、 $P=0.017$)。再飲酒者では病理学的変化が軽度に発現したが、炎症や線維化は有意な差はなかった。	
結論： アルコール性肝硬変に対する肝移植を受けた患者では、臓器機能は良好で、長期の良好な生存率が観察された。再飲酒は長期予後を悪化させたが、肝癌や C 型肝炎の患者に比べると予後は良かった。	